



## 『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取りあげ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

### 第47回 創業 1918年(大正5年)

## 日東電工 株式会社

### 基礎づくりの時代 東京大崎での絶縁事業基盤づくり

**1918年**▶ 当時は、綿紡などの軽工業に続いて、鉄鋼造船などの重工業も飛躍的な発展を遂げている時代でした。その発展をささえるインフラとして、急速に普及していったのが電気でした。おりしも、その電気を利用する電気設備や電気機械等は、多くを欧米からの輸入に頼っていたため、第一次世界大戦の影響により、急ピッチで国産化しなければならない情勢になっていました。そして、電気設備や電気機械等に利用される電気絶縁材料についても、国産化が急務である中、その一翼を担うために1918年10月25日、「日東電気工業株式会社」が東京大崎に誕生しました。

はじめに開発・販売したのが、変圧器の絶縁用に使われる「電気絶縁用ワニスクロス」や、基材(布)にワニス樹脂を浸透させた絶縁シートである「リノテープ」です。



リノテープ



電気絶縁用ワニスクロス

### 第2の創業期 戦後大阪茨木での再スタート

**1946年**▶ 東京大崎工場を戦災で焼失したものの、戦後大阪の茨木で再スタートしました。1946年電線絶縁用

テープ「ブラックテープ」の量産を開始し、テープ分野に進出します。その後、プラスチックの急激な伸張とともに、軟質ビニルが出現しました。これをテープの素材として着目し、「ブラックテープ」に続く電気絶縁用テープとして開発したのが「ビニルテープ」となります。

この時代には最終消費財である乾電池やテープレコーダーをマクセルブランドとして製造販売。その高い品質で売り上げを伸ばしました。



ビニルテープ



マクセル乾電池



**ニッポ**  
転換点

**Nitto独自のマーケティング活動 「三新活動」**

**1957年**▶ 技術や製品に対して「新用途の開拓」、「新製品の開発」、「新需要の創造」の三つの「新」を追求する独自のマーケティング活動である「三新活動」がスタートしました。この活動は、市場に対し、先手を打つことで、あらゆる業界のお客様の期待を超え、「こんなものが欲しかった」と言われる製品を生み出します。

例えば、「ビニルテープ」の用途は、ビニルの持つ機械的強度、防食性、耐候性、耐薬品性から、絶縁用途だけでなく、防食用、農業用などの用途に展開しています。このように、既存製品から、さまざまな新技術・新機能の開発と、新用途

の開拓を繰り返し、新たな顧客・業界における需要を創造しており、現在も続くマーケティング活動で、成長エンジンのひとつです。

「ビニルテープ」という現行事業から「新用途の開拓」、「新製品の開発」、「新需要の創造」の三つの「新」を追及する「三進活動」の展開例(下図)



## 工業材メーカーとしての出発

**1961年** ▶ 高度経済成長期真っただ中であった1960年代の日本において、急成長が期待できる分野であった工業用テープへの進出と拡大を決断し大きな節目となる時代でした。

1961年、消費財部門マクセルを分離し、工業材メーカーとしてさらなる飛躍を目指しました。1962年、現在も国内の粘着テープ主力工場である豊橋工場（愛知県）で、1967年、関東工場（埼玉県）で操業を開始するなど、製造拠点を増やしました。1968年、日東電工アメリカ設立、1969年、台湾日東電工設立と、海外にも進出し海外生産も開始しました。現在の礎を築いた1960年代は、ちょうど創立50周年（1968年）を迎える節目の時代でもありました。

同時に「三新活動」の浸透により、様々な技術や用途への展開が始まり、工業用テープは両面テープや家電部品や鉄道車両機器などの高温部品の絶縁用フッ素樹脂テープ「ニトフロン™」などへ展開し、売上が大きく伸びるようになりました。



両面テープ



フッ素樹脂テープ

## 事業の多核化とグローバル化

**1973年** ▶ 1973年のオイルショックによる影響を受け、いかなる景気変動にも耐えうる強固な企業体質をめざして多核化を推進しはじめました。

偏光板やタッチパネルのスイッチの役割をもつ「透明導電性フィルム」などのエレクトロニクス分野に加え、薬を皮膚から吸収させ、体内に導くテープ製剤である「経皮吸収型テープ製剤」などの医療分野や、牛乳・果汁等の濃縮に使われる「逆浸透（RO）膜」といった膜事業分野に参入し、さまざまな製品を誕生させました。多くの皆様に長く愛用されているフロアクリーナー「コロコロ™」が誕生し

たのもこの時期です。

1974年には、ヨーロッパにおける生産子会社となる、日東ベルギーを設立。後にベルギー国から、優良企業として何度も表彰を受けるまでに成長しました。

1987年には、下水として使用された水や海水を、再び浄水や工業用水として使えるようできる膜事業の世界的な展開を図るため、米国・ハイドロノーティクス社を買収しています。これは初めての海外企業買収でもありました。これをきっかけに膜事業を加速的に進化させることになりました。

社名を日東電気工業株式会社から、日東電工株式会社に変更したのも、創立70周年となる1988年のことでした。



コロコロ



経皮吸収型テープ製剤



ここが  
転換点

## 事業部制の導入と「Global Niche Top™」戦略

**1989年▶** 1989年、顧客奉仕の原点に帰り、ダイナミックな市場変化へのスピーディーな対応を図るため、事業部制を導入しました。

また、1996年には、世界的に成長・変化するマーケットを見極めて、その中のニッチな領域を対象に、グループ固有の技術・知見の融合により、なくてはならない「製品」「機能」「ビジネスモデル」を継続的に生み出すことで、世界トップシェアを狙う「Global Niche Top™」戦略もスタートしました。2002年には日本で商標登録し、現在も続く経営戦略の一つとなっています。

「Global Niche Top™」製品の例として、小型電子部品の製造工程で自動化・省人化に貢献する熱はく離シートの「リバアルファ™」などがあります。

また、製品だけではなく、偏光板の原反をお客様の工程内にそのまま持ち込みそこで切断、検査、ガラスまでの貼り合せを一貫でおこなう新しいビジネスモデル「ロールトゥーパネル™」を開発。

知的財産を有効活用し、収益化に繋げる先駆けとなり、「知財功労賞」受賞など外部からも高く評価されました。

## Innovation for Customers ESGを経営の中心に

**2013年▶** 2013年、「日東電工」を「Nitto」と表記し、現在の企業ロゴに変更、2014年には現在のブランドスローガンである「Innovation for Customers」を制定しました。

2018年に創立100周年を迎えました。これまでの100年は顧客とともにイノベーションを進め、利便性や世の中の進化に貢献してきましたが、「お客様」の概念を、直接の「顧客」だけではなく、さらにその先にある「地球環境」や「人類・社会」に広げています。環境や人類への貢献を可視化し、中でも特に貢献度の高い製品をPlanetFlags™/HumanFlags™(環境・人類貢献製品)として認定するスキームを2022年に策定しました。また、より良い地球環境を将来世代へ継承していくため、「Nittoグループカーボンニュートラル2050」を宣言し、脱炭素社会の実現に向けての取り組みを加速させています。



環境貢献製品

製品ライフサイクルの中で、地球・宇宙の環境保全、環境改善に価値を提供する製品・サービスを認定



人類貢献製品

すべての人の健康・安心・平和な未来社会の生活に価値を提供する製品・サービスを認定

環境・人類貢献製品

ESGを経営の中心に置き、Nittoらしい取り組みを通じて、社会課題の解決と経済価値創造の両立を目指します。新たな製品・サービスの創出を加速させ、持続可能な地球環境や人々の健やかで快適な生活の実現に貢献していきます。

# Nitto

Innovation for Customers

### 日東電工 株式会社

本社所在地：大阪市北区大深町4番20号 グランフロント大阪 タワーA 33階  
従業員数：単体6672名（連結28,371名） 資本金：267億円  
事業内容：工業用テープ、偏光板などの光学フィルムなどの製造販売